
東方災生変

DHMO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方災生変

【Nコード】

N5350X

【作者名】

DHMO

【あらすじ】

性格が厄介な青年と過去が厄介な相方が幻想入りする話。この話は稚作「東方魂合変」の次回作に当たる話です。出来が悪いですが前作の方もどうぞ

XXX：そして赤い青年は（前書き）

初めての人ははじめまして。前作からついて来てくれた人はお待ちせしました。漸く第二部のスタートです

前作とは違って重暗い話になってしまいかもしれませんが、その辺りは申し訳無いです。楽しんでいただける様、心血注いでいきます。

それではプロローグをどうぞ

XXX：そして赤い青年は

見た事の無い和風の家に、私は寝転んでいる。視界には茶色い木の天井。身体は指と目しか動かせず、自分で立ち上がる事も出来ない。

風が流れて涼しくて、草木の揺れる音が柔らかくて、心地良くて、今にも眠りに落ちてしまいそうだ。

けれど暫くすると、急に視界が動き出す。頭と胴の後ろに体温を感じた。誰かが私の事を持ち上げている様だ。がさつな扱いをされて、私の眠気は何処かへ飛んでいった。

何時もの私なら不屈き者に御札の一枚や二枚投げてやるけれど、今の私はされるがまま。不快さが無いのがせめてものの救いだ。

浮かび上がっては元の高さに落ち、上がっては落ちる景色。どうやら、高い高いをされているみたい。これで喜べる赤ん坊と言える時期はとうに過ぎた筈なのに、とても楽しい。

この感覚が、私を支配している。この「空くうに浮く」感覚、「空そらを飛ぶ」感覚が、私の全て。

何故かは分からない。きつと、この時が私の持つ最初の記憶だから。

寺子屋に通う位の年頃だろうか。不思議な服を着た女の子が、朝霧で霞む長い長い石段の一番下に座っている。赤い袴を腕にくっ付いてる様な白い袖で覆っているのは、きっと膝を抱えているから。黒髪が俯いた表情を隠し、起きてるのか寝ているのかも分からない。だけど私には、何故かその子が寂しがっている気がした。

どうしたの？

私が声を掛けると、女の子は顔を上げる。その顔は、予想に反して不機嫌そうな顔だった。

誰？ なんの用？

ぶっきらぼうな声。ジトツとした目によく似合う声で、少し可哀しい。

私はマリサ。アナタは？

……レイム。で、なんの用なの？

レイムの隣に腰を降ろしながら、その問い掛けについて頭を捻る。無計画なのは私の悪い癖だ。取り敢えず、思い浮かんだ事を言ってみよう。

実は私、授業をサボったんだ。だから、その暇潰し。

……暇潰しに話し掛けたの？

またジトリ。不機嫌なのを示しているのだろうが、どう見ても可愛い。ここで笑ってしまえば本格的に機嫌を損ねそうなのでグツと堪える。

けど、あなたも暇でしょ？

暫くの沈黙は、恐らく肯定の意だろう。まだ日が高いこの時間帯に外を出歩く子供はそうそういない。寺子屋での初等教育は必要、と解いて回った先生が昔いたらしい。今も存分に教鞭と額を振っているだろう。

だとすれば、レイムは何故ここにいるのだろう。私の様にサボったのだろうか。

……博麗。

え？

今度は否定的な目つきは伏せられ、言葉だけで私に語りかける。

博麗の巫女ってだけで、なんでもかんでも詰め込まれるの。ほんと、バカみたい。

……ハクレイ、の、巫女……。

何処かで聞いた。幻想郷ココの管理者だとか、守護者だとか。およそ人間とは思えない性能の巫女。

レイムは、ハクレイの巫女なんだ？
見習い未満のね。先代巫女に拾われたのが運の尽き、だって。こちら赤ん坊の頃だったの。

大人びた振る舞いだと言うのに、頬を膨らませたりする仕草や表情は子供そのものだ。行動と言動と外見がミスマッチして、実年齢を計りづらい。

巫女って、スツゴい強いんでしょ？ 何が出来るの？

我ながら、分かり易く子供らしい質問だ。ブツブツと文句を言うレイムも、そんな質問で毒気を抜かれてしまったらしい。

少しだけだけど、飛んだり、御札書いたりとか、五行の初歩とか……

ゴギョウ？

聞き慣れない言葉に首を傾げる。うーん、と少しばかり唸ると、突然レイムが立ち上がった。長い黒髪と白い袖が揺れる。

こっとうモノよ。

何処からか取り出した紙片。ミミズがのたくった、と言うには少しばかり気品を感じる線が描かれていたが、そんな考えは次の瞬間に消え去った。

水生木、疾れ！

例えるなら、雷光の河。目の前の少女が構えたタダの紙切れから、白い奔流が産み出された。

これこそが迅雷、と言うのだろうか。大地を焦がす儚い光を眺めながら、自らの少ない語彙から捻り出す。

これが、私の原風景。

稲光に、『魔法』に魅せられた私が、この時生まれたんだ。

罪。

それは、自分の歩んできた道。

それが、自分の存在条件。

一生の苦楽を共にし、永遠に対峙する半身。

最初の罪を犯した時こそが、自分が世界に認められた時だった。

紅い霧に包まれ、非現実の帳が降りる幻想郷。

紅い風景を二人の少女は飛ぶ。

紅い眼の悪魔はそれを待ち構える。

紅い狗は刃を研ぐ。

紅い門番は眠りから覚めず。

紅い妖精達は何時も通り。

そして赤い青年は

XXX：そして赤い青年は（後書き）

いきなり紅魔郷スタート……と思いきや、次話からは主人公の幻想入り前に視点を移します
相変わらず書き貯めていないのでお待たせしてしまいますが、みんな待っててくれッ！

001：二種の来訪者（前書き）

第一部では直していなかった一字空けや行間詰めを実行してみたり
そんな事の前に執筆速度と内容の厚さを兼ね備えたいと思った今日
この頃皆さん如何お過ごしでしょうか

001：二種の来訪者

ある県、ある山間部の町の、それなりの高さの山の上に立てられた神社。それなりの縁起と御利益があるらしく、昔からそれなりに信仰されていた、らしい。

らしいと言うのは、正直自分では信仰されているのかどうかなんて分かったものではないからだ。担ぐ筈の御神輿は蔵で埃を被り、賽銭箱は閑古鳥の巢と化している。こんな現状では、本当に神様なんてモノを奉っていたのかどころか、宗教として成り立っていたのかすら怪しい。

社務所と居住区と本堂が重複してるし、そもそも御神体が無い。一応蛇かなんかの彫刻はあるけれど、子供の手遊びで出来たんじゃないかと思うぐらいの代物だ。

そんな訳で、休日にわざわざ来る様な物好きもおらず。

「……ふう」

二十歳の自分一人で勉学に勤しんでいても全く問題無い。誰か雇いたくても金が無いし、雇う必要が無いのが本音だ。

机上の参考書を一旦片付け、冷蔵庫の中から飲み物を出そうとする。生憎とお茶入れに入ったそばつゆしか無い、と気付いた時には吹き出していた。

口直しに常備している栗饅頭を出す。表面がなにやら緑色のモノに包まれていたのでゴミ箱に投げ入れる。

「……買い出しいくか」

生来の出不精が憎らしくなりながらも、高校のジャージから黒いシャツとジーンズに着替え、ポケットに薄い財布を入れる。誰が入れるかも分からない賽銭と肉体労働のバイトだけでは生活費も危うい。進学はまだまだ遠そうだな、と先程仕舞った参考書を思い溜め息を吐いていると

ピンポーン

「……………?」

来客を知らせるベルが鳴った。ここ数年使われて無いと言つのによく機能したものだ。などと関心している暇は無く

ピンポーン、ピンポーン

「はいはいはい、今出ますよ」

間髪入れずに二回の呼び出し音。早く玄関に行かなければこれ以上呼び出されてしまうだろうから歩行速度を上げる。

古びた引き戸を出来るだけ優しく開ける。新聞屋なら何時も通り断つてやればいいし、押し売りなら塩でも……そうだ、塩も買つてこなければ。

心の中の買い出しリストにペンを走らせつつ、自分呼び出した者を確認する。

「こんにちわ。京都の 大学『秘封倶楽部』のマエリベリー・ハ

ーンと申します」

「……はあ……？」

予想外、想定する事が出来ない範囲からの訪問者が現れた。

まず見た目。金髪の女性 しかも自分と同年代 な

ぞついで見た事が無い。それにそんな人が丁寧にお辞儀をしながら流暢に日本語で喋っているとは二重に驚く。端麗な顔立ちなら尚更だ。変なフリルの帽子とおばさんが着そうな紫の服は減点ポイントだが。

その後ろには、黒髪の女性。金髪女性とは違ってワイシャツにネクタイ、黒いスカートに黒い帽子と、白黒とした服装だ。どこな

く男っぽく感じてしまうが、スカートを穿いているから女性だろう。

「あー……ええつと……大学の学生？ さんが、どうしてウチに？」

「えっ」

「えっ」

しどろもどろに問うと、奇妙な掛け合いの後に呆けた顔をする女性……ハーンさん。寧ろ呆けたいのは自分の方なのだが、と思っていると、確認する様にハーンさんが訊いてくる。

「あの……確か一週間程前に、電話で御連絡を差し上げた筈ですけど……。此方の神社についての取材をさせて頂けないかと」

……万年受話器に埃が被ってるウチに電話なんて掛かってくる事があつただろうか。間違い電話すら無いし、友人からの電話なんてものは掛かってくる訳が無い。

「あゝ、その事なんだけどさ、メリー」

バツが悪そうに頭を掻きながら、ハーンさんの後ろに立っていた対照的な日本人女性。二人の共通点と言えば、種類は違えど帽子を被っている事だろうか。

メリー……恐らくは愛称だろう。そう呼ばれたハーンさんは、黒髪女性の方に振り返る。一瞬だが、綺麗な顔立ちが歪んでいた様に見えた。

「蓮子……まさか」

「いや、連絡しなきゃなーとは思ってたんだよ？　だけどまさか連絡先書いた紙を無くしちゃうとは思ってなくてねえ。仕方無いからアポ無しでもどうにかなるかーって」

あれだ、良く言う割れ鍋に閉じ蓋と言うか、凸凹コンビと言うか、そんな感じがする。割れ鍋の場合は亀裂が致命的過ぎて、凹なら深すぎて底が見えない位だろうけど。何故か。ハーンさんのうなだれっぷりが似合い過ぎていたから。

「ハアア……確認しなかった私が悪いわね……」

長い溜め息を吐き終わると、恥ずかしそうに顔を赤らめて此方を向くハーンさん。咳払いで場を仕切り直そうとしても無駄ですよ。

「大変申し訳ありません。此方の不手際で連絡せずに伺ってしまい」
「……その様で」

件の不手際の人は悪びれる様子は全く無く、口笛まで吹いて忘れようとしている。今時そんな誤魔化し方もどうだろう。

「いや、別に連絡云々は良いんですけど。一体、ウチにどんな用事があるんですか？」

先程言っていた『秘封倶楽部』と言う単語。部活……大学だとサークルか？の類なんだろう、多分。そのサークルの名前を出すって事は、サークル活動の一環で此処に来たと考えるのが妥当だ。とすれば歴史関連か、次点で日本文化関連か、無いとは思うが大穴、宗教関連か。

「それについては私、宇佐見蓮子がお答えしまっす！」

僕の疑問を聞きつけると、さっきまでぴーひゃらと口笛を吹き鳴らしていた女性がいきなり食いついてきた。

「私達『秘封倶楽部』はメンバーは二人だけど、良くあるただの霊能者サークルッ！但しッ、霊能者サークルだけど除霊や降霊とかは行わないッ！周りからはまともな霊能活動をした事のない不良サークル、と思われてるがその実態はッ」

ヤケに熱血口調な割れ鍋が取り出したのは紙の束。差し出されるままに手に取り、まず一枚目に書かれた文字を見る。

「……幻想郷？」

「そうッ！我々の目的はその妖怪の隠れ里、幻想郷を見つける事であるッ！」

かつての日本には、いや世界中には幽霊や妖怪、妖精、神様の類がいた。それを否定するには否定出来る証拠は無いし、肯定するには材料が多過ぎる。

だが現代において彼らの目撃情報は余りにも少ない。かつては共

に杯を交わした鬼は消え、圧倒的な力を誇る天狗も失せた。

何故、今現在彼らは存在しないのか？ 死滅したのか、隠れているのか、そもそもいなかったのか。

これらの謎を解く鍵は、各地の伝承に残っている 以上、

『秘封倶楽部報告書：幻想郷』序文より抜粋。

「……お二人が此処に來たつて言うのは、まさか……」

「はい、此方の すいか 水香神社の文献を、どうか拝見させて貰えないかと」

流石に立ち話を続ける雰囲気では無くなったので、応接間兼本堂にお二人を通す。粗茶と先程のレポート、菌糸の魔の手から唯一免れた柿^{ピー}を載せた机を挟んで、詳しい事情を聞く。

なんでも彼女達、三百年以上前に書かれた外国の書物『幻想ノ郷』（日本語訳）のみを手掛かりに、大学でその研究をしているのだそうだ。『幻想ノ郷』（日本語訳）とやらは読ませて貰ったが、どうにも荒唐無稽なファンタジー図鑑にしか思えない。真つ赤な館に住まう吸血鬼夫婦、モンスター妖怪が支配する山、幽冥に漂う桜、それらを管理する妖怪、巫女。訳が分からないし理解出来ない。

確かに夢物語にしては細か過ぎる。かと言って決定的な証拠にはならない。何故ならこれは

「ご無礼を承知でお願いします。どうか」

「い、いえ、そんな。頭を下げられても……」

中々返答を寄越さない僕に深々と頭を下げる二人。しまった、そんなに渋っているのでは無いのだが。

「多分、古書の類なら蔵にあると思います。お見せするのは勿論構わないです」

その言葉にパツと顔を明るくする二人。ガッツポーズやハイタッチをどうにか抑えている宇佐見さんを横目に、ハーンさんはまたお辞儀をする。

「……その前に。少し、質問して良いですか？」

晴れやかな顔の二人に訊くには、少し悪いかもしれない質問。けれど、僕にはどうしても訊かなければいけない質問。

「その……お二人は、所謂、霊能的なものを信じているんですか？」

「……ん？」

初めて、の筈。だけど見覚えと言うか、感じた覚えのある空気。外見は違っていても、此処の土地は印象が強過ぎる。

気の向くまま足の向くまま進んでいたけれど、今度と言う今度は終着点かな？ 前みたいに変な棒を投げられたらやだけど、そこはプラス思考プラス思考。

「そつだとしたら……まずは腹拵え！ すんませーん、一番良い料理を！」

「らっしやいッ！　ウチのは全部が全部旨いよッ！」

料理人のあんちゃんの御託を聞いていたせいか、どんな店でも安牌のカレーに行き着くまで二十分掛かった。海無し県の癖に浜茶屋のカレーの味がしたのはきつと気のせい。

001：二種の来訪者（後書き）

とゆー訳で、初登場の原作組は秘封倶楽部のお二人でした
……と言っても、別に未来な要素は全く無いですがね。現代に二人
がいたら、的な感じで話は進んでいきます。あしからずー

002:一人+一人〃? (前書き)

何日も待たせてごめんなさい
出来が良くなってごめんなさい

土下座

002：一人＋一人？

水香神社、客間兼社務所。昼前までは何時もの風景だった筈が、今ではカビと埃の臭いと大量の紙が占拠し、目も当てられない光景となっている。後々の掃除と消臭剤を売っている店への道順に脳を使いながら、蔵から持ってきた古紙を僅かに見える床へと置く。

「ウチにある本はこれ位です。道具の類は蔵から出しづらいので…」

「後で蔵の中を拝見しても宜しいですか？」

「ええ、勿論」

古書まみれな部屋の中で、一心不乱に作業をする二人、マエリベリー・ハーンと宇佐見蓮子。二人共々同じ顔、同じ眼差しでページをめくり、ペンをノートに走らせる。

別に、彼女達を笑うつもりは無い。僕が見た事が無いから、知っていないから、彼女達の言う事が嘘だと言う事は無いし、否定なんてする気は無い。

だが、それは認めるについても同じ事。彼女達の言う事を真実とする事も無いし、認める筈が無い。

結局、僕にとってはどちらでも良いのだ。彼女達が信じているモノがあったとしても、それは僕には関係無いのだから。だから蔵も開放したし、面倒で無ければ手伝いもする。

「あ、買い物忘れてた」

軍手を外して一息ついていたら、ふとゴミ箱の中の青カビの塊が目に入り、来客前の出来事を思い出した。しかし、今出てしまえば客人のみを残す事になる……

「……別に構わないか」

あの二人なら、物取りなんかしないだろう。古書なら引き取ってくれるのがありがたいし、金目の物は既にポケットに避難済み。何よりいきなり押し掛けてきたのは向こうなのでどうこう言われる筋合いは無い。

集中している二人に声を掛けるのは気が引けるので、静かに玄関へと向かい靴を履く。

……別に声を掛けるのが怖かったり面倒だったりする訳では無い。断じて違う。

腹拵えを済ませ、ぶらぶらと街中を歩いてみる。手に持った旅行鞆を持ち替えながら思索するも何も浮かばないのが現状だ。目的はあるにはあるけれど、別に急いで済ませる事でも無い。

「暇なんだよねえ……」

やる事があってもやらない。やる気にならない。だからと言って何かやる訳でも無い。

他人から見たらぐーたらなんだろうけど、本人からしてみたら大変な事だ。俗に言うには……なんだろう、仕事や勉強が手に付かない、
つてのが今の状況か。

「うーん、さっさと行こうかなあ？」

時代に取り残された、と言えば大袈裟だ。だけど、この村にも今の時代にそぐわないモノが残っている。

信仰。信心。神氣。神力。或いはその類。いや、此処だからあるんじゃない。此処は変わらないから残つてるだけなんだ。

神社の行事が盛んに行われている訳じゃないだろうけど、他が無くて尚且つ疑っていないから、こんなに残っている。

「……まあ、全部憶測だけだね」

独りごちていると、何時の間にか長く細い階段の下にいた。生い茂っている木々や長年踏み続けられていた石段を見る限り、目的地に相違無い様だ。

山頂へと続くバリアフリーなんかとは無縁の悪路。入り口付近の看板には『水香神社』と書かれている。

「……いっせ、ちゅちゅー!」

何を迷っていたのか自分でも分からないけれど、とにかく進む事にした。旅行鞆を背中に回し、古びた階段を勢い良く駆け上がった。

「え？」

下って来ていた青年に気付かない程、張り切って。

002:一人+一人〃?(後書き)

次話から話が進む……答

003: ? + 二人 〃 三人 + 独り (前書き)

昔に戻ったような文字数

まずは更新ペースを崩さないようにしよつと

003：？＋二人〃三人＋独り

鈍い音が二、三回した気がする。確実な一回は、いきなり下から登ってきたナニカが腹に当たった音だろう。

なんとか倒れるのを堪えても、今度は腕をナニカに掴まれる。予想外の加重によって元から無いような体幹はあっさりと折れ、共々転がり落ちた。

「いッ、たぁ……………」

「……………」

どういった経緯か分からないが、上段にいた筈の僕が下段から上がってきたナニカの尻に敷かれている。地獄車じゃあるまいに。

「あ、君大丈夫？　ごめんね、いきなり頭突きなんて食らわせちゃって」

声から察するに、ナニカは女性の様だ。行動からも分かるが、元気が有り余るタイプの。

「………… ホントに大丈夫？　息してるかな」

「………… 無事を確かめるなら、まずどいてくれるかい」

ベタベタと身体のアチコチを触ろうとする手を払いながら、上体だけ起き上がらせる。女性も漸く気付いたのか、僕の下半身を椅子代わりにするのを止めた。

「どこか怪我とかしてない？　してたとしても何も出来ないけど」
「……………平気だよ。うん」

立ち上がり身体に付いた土埃を払いながら、突撃してきた女性を見る。

真冬でも無いのに分厚そうな外套。凹凸も隠れる服装に身を包んだ、銀色の髪的女性がそこにいた。ハーンさんと言い、この女性と言い、目立つ髪色を二連続で拝むなんてどういう日なんだろう。

「まあ本人がそう言うならいいけど」

僕の無事だと分かると同時に、一緒に転がり落ちたらしい旅行用のトランクケースを手取る。どうやら、無駄な心配はしない質のようだ。

会釈をして再び階段へと向かおうとした女性が「あっ」と声を出して振り返る。

「君、この上の神社について何か知らない？　どんな神様が奉られてる、とか。どういう神主がいる、とか」

……………？　なにか妙な噂でも立っているのだろうか。一日の内で二回も神社について訊かれるなんて、珍しい。

「何を奉っているかは知らないけど、神主なら知ってるよ」
「へえ、どんな……………ッて、やっぱり怪我してるじゃない」

白い指が指していたのは、僕の左のこめかみ辺り。それに気付く事で、漸く顔の皮膚が触覚を取り戻していた。

頬に、熱い液体が流れている。胸中の鼓動を感じ取りながら手で

拭って見てみると、指先が赤く染まった。

これは

「ハア、仕方無い。絆創膏貼ってあげるから、頭出して」

「あ、いえ、大丈夫なんで。ホントに」

足早にその場を去る。まともに服の埃も払ってないが、そんな事はどうでもいい。

「ちよつ、待って！」

呼び止める声を見捨てて細い道へと駆け込む。此処辺り一帯は自分の庭、と言う訳では無いが、余所者を撒く位なら簡単だ。

塀を潜り、廃屋を抜け、小道を曲がりくねる。五分程走っただろうか、壁に寄りかかり一息つく。心拍数はまた上がっていたが、心の方は落ち着いていた。

「最近は何事もない様に気を付けてただけだな……危ない危ない」

ハンカチで血と汚れを乱暴に拭く。摩擦熱を感じるまで擦ったが、傷への痛みはもう無かった。

虫の音が響く境内。夏から秋への移り変わりを感じさせる涼しさと騒がしさは、室内にいても感じられる。

「へえー、色んな神社を回ってるんですか」

「そそ。この前行ったのは……なんだっけな。変な棒と注連縄しか印象に残ってないや」

「神社ですか……少しお話を聞かせて頂いてもいいでしょうか？」

「いいよー、私の話で良ければ。けど敬語は止めてね、なんかくすぐったいし」

「そーそー、メリーったらいつも畏まっちゃって。もっとフランクになるうよ」

……後ろから聞こえてくる笑い声さえ無ければ。女三人寄らば姦しい、とはこの事だろう。

「おーい、なきひと尻人クンもこっちおいでよー。独りで飲んでないでさー」

「僕は良いんで、三人でどうぞ」

三人の内、宇佐美さんが幽夜ゆいさんが呼んでいる。酒飲みに絡まれるのは勘弁なので適当に返す。

本堂の戸を開け放ち、賽銭箱の隣で買ってきた栗羊羹をかじりながらお茶を啜る。家主だと言つのに肩身が狭い。ノーと言える日本人になりたいと思う秋の月下。

003: ? + 二人〃三人 + 独り (後書き)

どうなったかの経緯は次話で書きます

004：帰り道、帰る場所にて（前書き）

地味に連日投稿
短いけどね

004：帰り道、帰る場所にて

右手の袋には牛乳と栗羊羹とお茶葉、それと今晚のおかずの店屋物。左手のバケツには芳香剤と脱臭剤と乾燥剤。幾らか軽くなった財布の重さに不安を覚えながら、大通りを歩く。

はて、大学の二人はどうするのだろうか。宿を取ってるのなら夕餉の準備は何時も通りにするが……いや、流石にそこら辺はしっかりしているだろう。うん。

不安なのは先程の銀髪女性。ただの参拝客ならいいが、どうにも気になって仕方がない。

玄関の鍵は一応閉めてあるが、本堂の鍵は開けっ放しだ。物取りではなく大学生二人の方が心配……しなくていいか。荒らされたら片付ける苦労があるけど、それぐらいだし。

「……さて」

200段はあろう石段の0段目、事故現場に舞い戻った。上^家で何事も無ければ良いなあと祈っていた自分がいて、何を危惧しているのかと自嘲する。

水香神社への階段、218段目の広場……つまりは境内。灰色の鳥居を潜りながら、玄関へと向かう。

「……開いてる」

分かり易く、開け放たれている引き戸。家を出た時には間違い無く閉めていた筈だ、鍵だつてここに

「
」

右ポケット、薄くなった財布。

左ポケット、レシート。

尻ポケット、埃。

落とした？ けど落とす様な事なんて……心当たりと言うか確実な原因があつた。

もしかしてもしかするとあの銀髪女性が鍵を持って入つたのだろうか。いや、それは飛躍し過ぎだ。あの女性の何を気にしているんだ僕は。

荷物を置いて靴を脱ぎ、手近な箒を手取る。念の為だけれど、本当に危険な事があつたら何の役にも立たないだろう。

人の気配、なんてものは分からない。だけど、明らかに静か過ぎる。

箒を握る手に力を込めながら、廊下をゆっくり歩く。まずはハーンさんと宇佐見さんがいる筈の居間へと向かつてみる。

「……………」

パラパラと本を捲る音が廊下まで聞こえてくる。けれど、そのスピードがなんだかおかしい。まるで本をひっくり返して捲っているような……とにかく、読んでいるスピードでは無い。

予想通り。窓と本堂の戸は開け放たれ、古書の香りを外へと追いつ出していった。

「二人共……帰った訳じゃなさそうだな」

二人の帽子は、帽子掛けに掛かったままだ。

つつかけを履いて本堂から出る。室内に彼女達がいなかった。残すは一つの場合しか思い当たらない。

薄汚れた漆喰の壁。飾り気の無い蔵の扉は開いたままだった。近づき、中からの音に耳を澄ます。なにやら話し声が聞こえるけど、内容までは分からない。

「よし」

簾を後ろ手に持ち、蔵へと踏み込む。

薄暗いその蔵の中。一点が光で浮かび上がっていた。そこには二人の少女と、一人の旅人とが立っていた。

(……………人形……………?)

三人に声を掛ける前に、その異常な光景に目を奪われた。恐らく

その場にいる全員が心を掴まれただろう。

飾り気の無い、巨大なデッサン人形。何故蔵にあるのかも分からないパペットが、漏れた光の中で踊っていた。

踊り 剣舞と言うべきか。粗野で乱暴な振り回し方しかしてないが、それがまるで雑兵を薙ぎ倒す武将の様な猛々しさすら帯びている。

「……さっきの君。やっぱりこの関係者だったんだ」

異質。異様。非常。非現。忘れかけたこの空気。

舞いが終わると共に、旅人が此方を向く。銀糸とも白糸ともつかないその髪は、ただただ美しかった。

「私は水元^{みずもと}幽夜^{ゆうや}。良ければ君の名前も教えてくれるかな？」

微笑みながら自分の名を名乗る女性……水元さん。それに知られて自らの名前をポロリと零してしまった。

「赤瀬^{あかせ}……^{なぎひと}凧人^{たこひと}」

「凧人ね、よろしく」

簞は何時の間にか地面に落ちて、代わりに水元さんの手が収まる。暖かい筈の手なのに、何故だかとても冷たかった。

そうして、僕は出逢ってしまった。

僕のこれからの運命を大きく狂わせる存在に

004：帰り道、帰る場所にて（後書き）

やっとこさ主人公のフルネームが出せたー

まあなんとなく分かるでしょうけどアレです、うん

ここまで読んでくれた方ならスルースキル位持つてるよね！

005：月下の閑話（前書き）

あがががが

スランプって怖い

005：月下の閑話

夜の本堂には明かりらしい明かりは無く、隙間から切れ切れに入り込む自然の光のみが頼りとなる。幼い頃から叩き込まれた瞑想紛いをやるにはとても丁度良い。

像の前を陣取り胡座を搔く。座禅の方が良いのかもしれないが、生憎と身体が硬いのでそこまで足は動かない。

「……………」

ピン、と張り詰めた空気を徐々に解して身体の外へ。足先、指先、筋肉から力を抜いていく。

「……………」

唯一残ったのは身体を支える背骨の緊張と、言い様の無い渦巻く力。自由に使えないその力の動きを理解し、手足に少しずつ伝わせる。

「……………」

バラバラになった四肢にか細い糸を通し繋げ、綿を入れていくイメージ。身体を作り直すこの感覚は、何時になっても慣れない。

……………いや、昔を思い出すから、だろうか。

「あら、面白い事してるのね」

「ッ!？」

紛れた雑念を振り払うと同時に掛けられる澄んだ声。

「……………幽夜、さん」

「うんうん、ちゃんと名前で呼んでくれる様になったわね」

昼間とは違ってTシャツと短パンと言うラフな格好の水元幽夜。銀色が印象的なストレートヘアに月光が透け、昼間とは違う雰囲気醸し出している。

よいしょ、と断りも無く隣に座り、座禅の真似事を始めた。禅は仏教だったかな。そもそも神道でも瞑想するのかすら知らないけど。

「そんな真面目な顔にならなくても。こうやって座ってるだけでもいいじゃない？」

そう言って手を合わせる幽夜さん。僕と幽夜さんの前にある像……一応、神様の姿を彫ったらしい木工像に対してなのだろうけど、南無南無言ってる相手に御利益あるかは分からない。

「……………幽夜さん」

「なに？」

再び目を瞑りながら質問し、目を瞑りながら返答される。

「鍵を返して貰ってない」

「あ、そうだったわね」

チャリン、と前で金属が置かれる音がした。正直な所、鍵なんて

無くていいんだが、やはり他人に持たれているのは不快だ。

「なんで人の家に勝手に上がり込んだんですか？ 参拝なら本堂に行けばいいし、僕を待っていたなら玄関の前で待つなりあったでしょう。不法侵入ですよ」

「……懐かしかったから、って言って信じて貰える？」

懐かしい？

「私には昔の記憶が無い、って言ったでしょ？ 多分思い出せてないだけなんだろうけど、そんな過去が無い私がこの場所を懐かしんだ。だからちよっと抑えきれなくて……まあ、犯罪には違いないけどね」

本人曰く、記憶には四つのプロセスがあると言う。

銘記：新たに得た情報を纏め、

保存：その纏まった情報を脳内に保管し、

再生：保管した情報を見返し、

再認：得ている情報と得た情報と比較し、相違点等を確認する。

この四要素の内彼女、水元幽夜は『再生』に一部欠損があるらしい。

なんでも、十五年以前の記憶が全く思い出せないとか。目が覚めたら川辺に引つかかってて、そこから当ても無く彷徨っている、と言っていた。

「懐かしいって事は、この神社に来た事があるって事ですか？」

「ある……んだろうけど、どうも駄目ね。あの人形に触れた時には一瞬戻りかけたと思うんだけど」

人形……倉庫の肥やしになってたガラクタのデッサン人形擬きが、まさか動き出すとは思わなかった。鉄製の癖にめつきり錆びないのは怪しいとは思っていたが。

「良かったら差し上げますよ、あんな人形。あっても邪魔なだけなので」

「なら、遠慮無く頂くわ」

遠慮なんてこの人間には存在しないだろう。こっちが状況を飲み込んでもない間に宿も飯も面倒を見る事を決めさせるなんて、普通出来ないし道德的な面があるならしない。

……女性が若い男の家に泊まる、ってのはどうなんだろう。胸部を除けば万人に通用する美人だとは思うのだが、本人にそう言う自覚があるのかは分からない。もしくは分かかっててからかってるのか。

「代金は身体で、とか言っても無駄だからね。そんじょそこの男ならはり倒せる自信はあるから」

……どうやら理解した上の行動の様だ。

その後、瞑想してるフリをして寝ていた幽夜を布団まで引きずる羽目になったのは余談。

ナニをしたとかそう言うのは天地神明に誓って無いとだけ言っておくのは蛇足。

005：月下の閑話（後書き）

短いですが出さないと何時までも出せない気がした
あーちくしょー

006：記憶録（前書き）

話がちんたらしてます

006：記憶録

隣で傘を構える女性。
血泥で汚れ眠る子供。
黒と橙に染まる風景。
水底から見える青空。
濃霧が掛かった河辺。
黒い線だらけの世界。

この六つが、私に残った過去。この六つこそが私本来の記憶。
だけど、何故だか。この記録がとても忌みしく感じる時がある。

思い出したい／思い出すな
大切なモノを／必要なコトを
穴を埋める為に／傷を広げない為に

「人間かしら？」

「妖怪だと思っけどなあ」

「人間にしては、だけど妖怪にしても……」

「……………」

またもや三人＋独りの状況。秘封倶楽部活動二日目は、ある話題で持ち切りになった。

切欠は宇佐見さんが発見した手記。何が書かれているかと思えば、ミミズがのたくった様な 現代人が見ても、恐らく当時の人が見ても解読不能である文字が書かれているだけだった。

なんとか単語を予想しながら読み進めてみると、どうにも『妖怪』としか読めない単語が多い。昔の宮司がお祓いでもしていたのかもしれないが、それにしても『妖怪と酒を飲む』だのフレンドリーな記述が多い。

問題は、書き散らかされた日誌

鬼に会う

月を攻める

西行寺へ行く

赤瀬に会う

人形を作る

その中に一文、『八雲紫が漸く

幻想郷を作る』とあったのだ。

「『八雲紫』……ハチウンムラサキ？ ヤクモムラサキ？ 変な名前」

「ムラサキじゃなくて別の読みがあると思うけど、この人物が幻想郷に深く関わってるのは確かみたいね。……それと、この『水元鉄生』も」

手記の筆者、水元鉄生。奇しくも幽夜さんと同じ名字であるこの人物も又、謎に包まれている。

あの人形も含め、蔵にあるほぼ全ての品を作り、その上蔵を作っ

たのもこの人物らしい。幾らなんでも嘘っぱちだろうが、どうやら水元鉄生がかつてこの神社においての権力者であったのは間違い無い様だ。

だが、気になるのはそこじゃない。

「……『漸く』……」

漸く。やっと、と同意の言葉。つまり、やっと幻想郷を作った、と言いたいのだろう。勿論この単語が解読間違えなら何ら問題無いし、『八雲紫』が前々から言っておきながら実行せずやっと、と言う意味なら良く分かる。

だけれど幻想郷の記述はこの一文しか無い。もし前々から話があったのなら、他にもそれらしい事を書いているのでは無いだろうか。なら、水元鉄生は予め『幻想郷』が作られるのを予測していた……？

(……ま、僕には関係無い、か)

神社について気にならないと言えば嘘になるが、どうせ出て行く我が家について知った所でどう出来るか。精々謂われを語るに語って値を釣り上げる位だ。口下手な自分に何か益があるとは思えない。そつと席を立ち、空になった湯呑みとお茶請けの皿を持って台所へ行く。

人形を触れた時、脳裏に過ぎつたのは一人の男。一本に結った銀髪を揺らしながら刀を振り回す、黒い袴を着た男。

まるで流れる水のように滑らかな一挙手一投足。同じ動作は一つも無く、気儘に駆ける変幻自在な風。

男と対峙した人形の見た景色は、私の の中に留まっている。

きつとこれは記憶でも記録でも無い、只の残り滓。戯れが偶々残ったモノ。それでも貴重な事には変わらない。

きつと、もつと想いが強いモノがあれば 或いは、こ

の喪失感が無くなるのでは無いだろうか。

006：記憶録（後書き）

笑いを取ろうと思って書けない文って意外と書き辛いなあ

007：男手とは（前書き）

ちんたら話を進めないでいるのは作者もイライラする
そんな思いが俺を駆り立てたんだ

007：男手とは

ガタゴト、ガタゴト。賑やかな音を鳴らしながら進むカートには、ガラクタが詰まった袋が乗せられていた。その総量、恐らく人間三人分。丁度等身大のガラクタ人形も入ってるしね。

それを片手で引きながら、もう片方の手には円筒形のカバン。中身は着替えや本の類であり、それが四つもあるのだから肩も腰も悲鳴をあげている。

ふらつきながら歩いていると、後ろから押されながらお調子者の激励の声が掛けられる。

「頑張つてー風人ー。電車出ちゃうぞー」
「……………ハア」

荷物分担を平等にしてくれるのなら、そういうサービスはいらないのだけど。

自分でも分からない。何故僕が荷物持ち紛いの事をしているのか。時は昨日の朝へと巻き戻される。

「守矢神社」

開口一番、居座り始めて一週間になる幽夜がいきなり聞き慣れない単語を発した朝食は白米となめこ味噌汁だった。

本当は前後の文があつたのかもしれないが、生憎と素人料理人が朝っぱらから台所以外に注意を払う余裕は無い。

「いきなりなに？」

「私がこの前行った神社よ。もう一回行ってみようと思って」

はあ、と相槌を打ちながら白米を茶碗に盛る。炊き立ての甘い香りが鼻腔をくすぐる。

「今度は思い出してくれかなあ……………あ、ご飯もうちよつと貰える？」

育ち盛りじゃないだろうに、やたらとご飯を大盛りにしたがるのは何故だろう。と言っても見た目は20かそこらの少女かどうかギリギリのライン。17歳と言われてもまあ通らなくは無いだろっけど無理矢理なAV臭がプンプンする。

「年齢？^{とし} 肉体的な年齢は分かんないけど、少なくとも15歳以上だよ。15年前からさまよってるし」

「15年前……………ん？」

見た目は…………まあ鼻肩目で見て17、8歳。正面切つて言うには控えられる程実直に言つと20そこら。

そこから15年を引くとすると、2、5、6歳から旅してるって事に…………？

「……まさか、子供の頃からずっと歩き回っているのか？」
「そんな訳無いよ。って言っても、子供の頃の記憶が無いから分からないけど」

いや、いやいやいや。

「そうじゃなくて、15年前って言ったら精々5、6歳かそこらだろう？ まあ、今の状態が若作りした結果って言うなら変わるけどさ」

「言うようになったじゃない風人クン。普通の女性だったら怒ってるわよ？」

やっぱり自分が普通じゃないのを理解してたのか。何時の間にか空になった汁茶碗を差し出してきながら、からくりについて話す。

「私の身体は、15年前から全く変化していないわ。髪が伸びたり垢が出たりはあるけれど、成長も老化もしていない」

「……………」

中世の自称魔術師達や中国の仙人かに聞かせれば泣いて喜ぶんじやないだろうか。彼女、水元幽夜が言っているのは正しく不老不死や不老長寿の類だろう。

「もしかして私の事、不老不死の仙人だとか思っていないでしょうね？」

「それ以外の選択肢が無かったんだ」

溜め息を吐きながら胃袋の容量を減らしていく幽夜。随分と器用だ。

「あのね、仙人ってのは人間の欲だとか排泄だとかを無くした人間を言うのよ。私の場合は欲求も新陳代謝も普通の人間と変わらないの。怪我したって直ぐに治らないし、中に浮いたりだって出来ない」

どうやら不老不死よりもそっちの方が勘に障ったらしい。しかしそんな事を熱く語られても僕には興味が無いのだが。

「神社の子なんだから、オカルト関連の事に詳しいのかと思ったのに」

「……オカルトなんか嫌いだよ、正直なところ」

両親の事を思うとね。

いろいろな言葉は味噌汁と共に飲み込み、食事を続ける。

「あら、でも君からも『そういうモノ』を感じるんだけどなあ。

頭の傷とか」

「……………」

頭の傷。彼女と初めて激突した直後に出来た擦り傷の事だが、今では痕さえ見えない。

「……言っただろ、怪我なんて無いって」

「血が出ていたのにそれは無いわよ」

「見間違えや聞き間違えを盲信するのは評価出来ないな。元からしてないけど」

少しばかり辛辣な口調が表に出る。悪い癖だが、どうせ気にする様な相手でも無い。

幽夜が見透かす様な青い瞳で此方を見るが、それもすぐに残っていた朝餉へと向けられた。

昼前になり、秘封倶楽部の二人が今日もやってきた。

「あの、お二方。その荷物は……？」

……何故か大きな旅行バック付きで。

僕の疑問に宇佐見さんがキョトンとした顔で答える。

「あれ？ 昨日言ってなかったっけ。明日幽夜さんの誘いで別の神社に取材に行くから、宿を引き払ってお世話になりますって」

「一度たりともそんな事は聞いてないよ僕」

勉強でもしてる時に言われたか、それとも幽夜が安請け合いたのか。後ろから「あっはっは」とか笑い声が聞こえるから多分後者なんだろう。

「あ、あの、やっぱり迷惑でしょうか……？」

分かり易く恐縮しているハーンさん。その他二人は良いにしても、この常識人をぞんざいに扱うのは流石に気が引ける。

「いや、泊まるのが一晩だけなら大丈夫だけど……」
「けど？」

「……いや、いいや。取り敢えず、寢床を確保してきますね」

雑談に花を咲かせる幽夜と宇佐見さんの脇を通り、本堂へと向かう。古書や古物まみれとなった客間に寝かせる訳にもいかないし、二人分の場所と言えば必然的に本堂しか無い。因みに幽夜は僕の部屋の押し入れに居座っている。本人曰く下宿人は押し入れで寝るべきだとか。まあ邪魔になる訳でも無いし問題無いのだろう。

二人分の布団を運び一息ついていると、三人の笑い声が廊下から聞こえてきた。

嗚呼、つくづく思う。良い様に使われてる、と。

「朝一の電車に乗って寄り道しないで行けば、昼過ぎ辺りには着くんじゃないかな？」

「早起きしないとなあ……ねえメリー、目覚まし時計って持ってたっけ？」

「あっても壊すでしょ、蓮子は。私が起こしてあげるから無駄な心配はしないの」

「あ、やっぱり起きないって見抜かれてたか」

疎外感は一瞬人々を成長させる。時には三点リーダーを挿入させる野暮さを無くす程に。下らない。

資料整理が粗方済んだ二人は、守矢神社への旅程を幽夜と共に考えている様だった。向こうの宿と神社への連絡ハーンさんがキチンと行ったらしく、後は道順通りに行けるかどうか、と言う初めての

お使いよりも簡単な状況らしい。

「電車を乗り過ごしたら明日中に着かないかも知れないけど、その時は勘弁してね？」

「大丈夫です。夫のお陰で慣れてますから」

「ハハハハハ」

「笑い事じゃないだろ、ついで夫は否定しろよ宇佐見さん」

「ホホホホホ」

「H A H A H A H A H A」

思わずツツコンでしまうと陽気に笑う宇佐見婦妻（？）。ツツコミ役がいないと何処まで爆走するか分からない二人だ。
呆れていると、時刻表を畳みながら幽夜が此方を見てくる。

「対岸の火事みたいに振る舞ってるけど、風人クンはちゃんと準備してる？」

「何の」

「明日の準備」

……………What?

「……すみません、仰っている事が分かりかねます」

「だから、守矢神社に行く準備は？　って」

どうやら、この女性は心の中で話した事が全員に伝わり尚且つそれが否定されないとでも勘違いしている様だ。僕がついて行くだなんてそんな話を一片も聞いてはいない。

「なんで僕が行かなきゃならないんだよ。損しか無いだろ」

「世の中損得勘定だけで図るのは良くないよ？　か弱い女性三人だ

けで重く荷物を持って行くのは可哀想だとは思わない？」

詰まる所、荷物持ちが欲しいらしい。

「お断りだよ。僕だって暇な訳じゃないんだ」

「なんか予定あるの？」

惚けた顔を向けてくる幽夜の眼前に突きつけたのは、大学受験生
の間で人気の某チャートなんたらとか言う赤かったり青かったりする
参考書。

「ベ・ん・きよ・う・だ・よ！！ 此方と浪人生だったの！ フラ
フラと旅行なんざ行つてられる身分じゃないんだ！」

文句はまだまだ油田が如く湧き上がり怒りは相応に燃え盛るが、
にやにや顔の三人を見て背中中に冷や水が走る。

ジリジリと壁際に追い込まれながら、逃げ道を探す。

「そーお、つまり風人くんは勉強が出来ないから行けないんだ？」

「あ、ああ。それに今月はちょっと厳しいし」

親戚の御厚意である仕送りと、端金とは言えど高校時代から雇つ
てくれている店のバイトの給金で何とかなっている生活だ。旅行
なぞ行こうものなら罰が当た……りはしないか。しかし厳しいのは
事実。

「ふう〜ん？」

「ッ な、なんだって言うんだよ」

なにか、三人がヤバイ。具体的に言うと、どうやって藁の家を崩

してやるうかと考えている狼の顔だ。

体感時間0・5秒。瞬時に視線を回し合った三人は、誰もが見惚れる笑顔で連携プレーを開始した。

「分かった、じゃあ旅費は私が出してあげよう」

「えッ？」

まずは幽夜がジャブを仕掛け、

「大学入試レベルだったら私達が教えられるよねえ、メリー？」

「ええ。少なくとも、一人ぼっちで参考書と睨めっこしてるよりはね」

「ええッ！？」

二人掛かりで甘言を囁いてきた。三人の身体が徐々に寄って来てるのは気のせいかな。

……落ち着け、よく考えろ赤瀬凧人。現役大学生が勉強を見てくれる上に金銭面ではパトロンが出来てしまったとは言え考えを鈍らせるな。いや偶には息抜きも、だが夏を征する者は受験を征すると、いや、だが、いや。

『……………』

爛々と輝く六つの瞳。あっさり頷くのはプライドが許さない。だがコイツらの誘いに乗ったとしても、精々荷物持ち程度だ。力仕事ならば僕としても楽な事。

溜め息の後、数秒の間を取ってから、右手を差し出す。

「……あんまり頭は宜しく無いけど、それでも匙を投げないと誓ってくれるなら」

この軽はずみな発言によって翌朝、腰を痛めるまでの重荷を引き摺る羽目になるとは思いもしなかったが、そのエピソードを書くには余白が狭すぎた。

007：男手とは（後書き）

と言うわけで少しずつ話が進んでいきます。風神録フラグ？ いや
いや、キチンと紅魔郷から始めますとも
原作開始までの道は遠いなあアツハツハ

008: gain time (前書き)

タイトルに深い意味はありません
ただ作者の心境だけです

「頼んだ私が言うのもなんだけど、良くこんなに運べたわね」

「お願いだから帰りは平等な分担にして下さい。お願いだから」

意地と筋力だけで人間何処まで行き着けるのだから面白くはあるだろうけどそんなものの検証はサスケでもやっていて欲しい。一般人にモンスターボックスが飛べないのと同じく常識の範疇外の重荷を背負うのは身体によろしくない。痛んだ肩に冷えた缶ジュースを当てながら溜め息が零れる。

電車での移動を終え、今度は宿へのバスを待つ時間。時刻表からすれば後10分程でバスが来る筈なのだが、その待ち時間がもどかしい。

秘封の二人は何時の間にか持ち出していたウチの本を読み、幽夜は秘封倶楽部が唯一の参考書として持ってきたトンデモ本を眺めている。今まで騒がしかった方々とは思えない静かさだ。見習って読書でもしようかと思うが、昔の人の妄想なんて読む気にすらならない。

考えれば可笑しな事態だ。彼女達が来なければ今頃素麺でも食べながらボーッと過ごしていたのだろうけど、何の因果か見知らぬ土地で荷物持ちをさせられている。浪人生がこんな所で馬鹿やってていいのかと疑問に思ってくるが、折角現役大学生が勉強を見てくれると言うのだ、給料代わりには良い、と思う。

もっと可笑しいのは、水元幽夜の存在。時代錯誤な旅人……いや、

記憶喪失だし自分探しか？　とにかく、そんな事をやっている風来坊が突然ウチにやってきて「見覚えがある」だなんて言い出したんだ。奇妙にも程がある。もしかしたら昔ウチと因縁があつたモノなのかもしれないけど、こんな人と知り合つた祖先の気が知れない。向こうから一方的に絡んできた可能性は十分に有り得るけれど。

ぐるぐると無駄な事を考えていると、左目の端に銀系が映り込んだ。

「……幽夜さん」

「なに？」

退屈していたのか、声を掛けると即座に本から顔を離して此方を向いた。今気付いたけど、この人の髪ってかなり目立ってる様な気がする。金髪や白髪ならまだしも銀髪ってあんまりお目にかからないし。

「その髪、どうにかならないの？」

「ん？　鬱陶しいからなんかで結つた方が良い？　まさかポニテ萌え？」

会話になってねえ。

「せめてハーンさんみたいに帽子を被つたりしてって意味」

「ああそゆこと。でもなんで？」

「そりゃあ、目立つから」

わざわざ言つてやらないといけない程なのかと疑問に思う人もいるかもしれない。だがしかし両隣が外人宜しく金髪銀髪に挟まれている僕の身にもなつて欲しい。余計に他人からの視線が気になる。

「って言ってもなあ……私、あんまり髪の毛に物を付けてたくないの。鬱陶しいと言うか」

「だったら伸ばさなきゃいいのに。髪なんて短い方が楽だよ」

そうすれば多少は目立たないだろうし？ 何より髪に物が触れない様にするにはそれが一番いいだろうし。

「む。そんな事言ったら、風人君のソレは何なのよ」

幽夜が指で示しているのは僕の顔の右半分辺り。右目が隠れるまで伸ばしている髪に付いて言っている様だ。

「別に良いだろ、習慣だよ」

「ふーん？ 顔に特徴が無いからせめてものオシャレとかそんなんじゃないの？」

「オシャレなんてものに興味は無いし、大体そんな事しても意味が無い」

色んな意味で。

「勿体無いなあ、結構イイ線行ってると思うけど」
「……………」

からかわれていると分かってはいるが、それでもムズいのは収まらない。目線だけでも抗議の意を示すが、にへらと笑う幽夜しかその線上には無かった。

「あ、バス来たみたい」

008: gain time (後書き)

原作キャラがないってこんなにも書きにくいのか

009：境界の内側へ 上（前書き）

今度はタイトルに意味があります。そのまんまですが
やっと幻想入りの目処がついたよ！

009：境界の内側へ 上

「初代の部長は高峰先輩で、副部長が沢城先輩だったっけ？」

「そうそう。高峰さんは真面目だったけど、おちゃらけてた沢城さんが意外と貢献してたり……」

「へえ、何時か会ってみたいなあ。色々面白そうな話も聞けそうだ」

「いいよもうこの展開は。どうせ三人で喋っていると僕が入る隙間なんて無いんだから。」

夕暮れの街並み。見知らぬ道を歩くのは少し戸惑うが、迷う事無く目的地へと進んでいく。

特に何かエピソードがあった訳で無いバスの旅と宿をすっ飛ばし、只今向かっているのは守矢神社。本格的に話を聞くのは明日にして、今日は下見だけだとか。

「……ん、お囃子だ」

微かに聞こえてくる笛の音と太鼓の響き。ウチでは録音したのを使い回しているが、此方ではどうなんだろう。一応神職の身では少し気になる所。

「夏祭りかあ。いいねえ、安っぽいソースの匂い、無駄に甘い駄菓子、どう見てもぼったくってる露天商……これこそが祭りの醍醐味だよ凡人！」

「知らないよ買つの早いよ買ってるんじゃないよ」

財布の紐が頭のネジと同じ位緩い人だ。秘封倶楽部の二人も苦笑いしている。

「お兄さん、その子らになんか買ってやんなよ。女の子は綺麗なのが好きだからね」

「遠慮します」

よッ、色男！ とか言いながら寄ってくるのはアクセサリーを取り扱っている店の主。しかし残念ながらこの旅行中は完全なヒモなのでどうしようもない。

「じゃあ私が記念に買ってあげよう。お二人もお好きなのをどうぞ？」

「おお、嬢ちゃん太っ腹！」

「やだもつ、嬢ちゃんだなんて」

ワハハと笑い合う露天商と幽夜。大阪のおばちゃんじゃないんだから。と言つかあんたらひょっとしてグルかなんかじゃなかるうか。サクラ的な意味で。

「じゃあお言葉に甘えて、私はこのブレスレット」

「それじゃあ……ネックレスで」

宇佐見さんは赤い宝石の様な物で飾られたブレスレットを。ハーンさんはスミレ色に光るネックレスを選んだ。二人共、何というかそれらしいです。

「ありがとさん。……んじゃあ、その甲斐性無しのお兄さんはど

れにするんだい？」

カチンと来る言い方だが、さっさと決めないとからかわれそうなので黙って商品を見る。アクセサリーをこうやって見るなんて初めての経験かもしれない。

「……この指輪で」

選んだのは薄い青色の石が美しい、銀色の指輪。サイズに合うか分からないが、元から付けるつもりが無いので気にしない。

「おや、指輪かい。だったら二つセットにしといた方がいいかな？」

「風人ったら、もう告白する人が決まってるんだ？」

「出会って一週間で指輪のプレゼントか。でも残念、私にはメリーと言う妻が……」

「勘違いも甚だしいから三人共。安いから選んだんだよ」

大体、夜店の指輪で告白だなんて受け取る奴がいる訳が無い。そう言う問題でも無いか。

散々面白がられた結果、一つサービスで貰ってしまった。別に不満は無いのだが、かしまし娘達の薬指のサイズに合う様なのを選んでいたのが癪だった。

気が付けば傾いていた日も沈み、薄ぼんやりとした電球提灯が辺

りを照らしていた。

「下見だとか言っときながら、本当は遊ぶ気満々だったんだろあんたら」

僕の弦きが射的に興じている幽夜と宇佐見さんに届く訳も無く、隣のハーンさんを苦笑いさせただけだった。

「けど、楽しいからいいじゃないかしら」

「……そうですか？」

毎年毎年の面倒くさい行事と言っ認識しか無い僕には楽しさが余り伝わらない。大変だろうなあ、と労いの思いが出てくるのはその代わりだろう。

「風人君はもつと周りの空気に吞まれちゃえばいいのよ。何時も堅ければいいって訳じゃないです」

「あんまり面倒なのって好きじゃないんです。こう、みんなとワイワイって言うのは」

「面倒だなんて、主催者も楽しむのが祭りの決まり」

「それなら大丈夫だよ。ちゃんと楽しんでるから」

女の子？ 空耳か？

透き通る声に振り返ると、茶色い帽子を被った子供と、真っ赤な服を着た女性が立っていた。

「こんばんは。守矢神社へようこそ」

薄暗い所為か顔がはつきり見えないが、それでも視線を感じる。手汗が気になる程に。

「こんばんは」

喉の奥に舌が詰まる感覚を飲み込んで、なんとか挨拶を返す。分からない。分からないが、ナニカに睨まれている。

「立ち聞きで申し訳無いけど、そちらの人は同業者かい？　ここは一つ、助けると思って賽銭でも入れておくれよ」

近頃の神社は何処も参拝客不足なのか。親指で示された先には本堂と賽銭箱が辛うじて見る事が出来た。

幽夜でも呼んでみようか、と一瞬思ったが、賽銭程度なら自腹でいいだろう。神社へと歩こうとした時、

「ダメ」

いきなりハーンさんが手を掴んで、静止の言葉を呟いた。

「あの人達の前の石畳。彼処に『境界』がある」

「境……？」

「……彼処から向こうは、普通の場所じゃない」

声に遊びが無い。彼女の言葉におふざけは無いと分かる。分かるが、何を示しているか分からない。

「幽夜さんの所まで一気に逃げましょう。何か分からないけれど、あの人達に関わっちゃダメ」

「い、一体何を見てるん」

「

ですか、まで言えなかった。僕にもソレが見えてしまったから。^{分かっ}

彼女達が立っている場所と僕達の場所は、明らかに違う。そう認識出来てしまった。

まるで怪物の口の様に／それは不可視の壁が如く
エサを受け入れていた／あらゆる敵を拒んでいた。

「な……………んッ」

アレは人が許される領域じゃない。あの石畳から先は何人たりとも侵入してはいけない。

彼処に入ったら最後

喰われる。

「どうしたの、お兄さん？」

裏表が無い子供の声。だけれど、今はどうしても負に傾いた聞き方しか出来ない。

逃げたい。ハーンさんの言う通り逃げ出したい。だと言うのに、
逃げる思考が畏れの感情に塗りつぶされる。思考も、実行も、視覚も味覚も嗅覚も聴覚も触覚も、全てが許されない。

嗚呼、忘れていた。この場所の名称も、どういった場所かも。
此処は『境内』 とつくに、彼方側腹の中なんじゃないか。

009：境界の内側へ 上（後書き）

と、良い所で切らせて頂きます。凧人とメリーがピンチっぽい状況です

漸くともに文章が書けてきた……かなあ

凧人が『境界』を視れたのには彼の能力が関係しています。どんな能力かはまだまだ秘密

実を言くと前作にも片鱗があったり無かったり

010：境界の内側へ 中 （前書き）

展開が少し早かったりするけど今までの巻き返しだと思って下さい
後風人カッコワルイ

010：境界の内側へ 中

「なにやってんのさ二人共」

一週間前から絶えず聞いていた声が現実へと引き戻す。再び振り返ると、かき氷を片手にストローのスプーンをくわえた銀髪の女性がいてくれた。

「幽夜……」

思わず安堵の声が出る。いや、寧ろ声が出せた事に安堵する。そんな事はお構い無しの幽夜がイヤに口角を歪めて可笑しそうな声を出す。

「手え繋いでお詣りだなんて、何時の間にそんな間柄に……って、あれ？」

幽夜が茶化すのを止め、突然前に出てしまう。ダメだ。彼方に行つては 元居た場所 いや、一刻も早く此処から出ないといけない。早く此方側に戻らなきゃダメだ。

そうだ、例えるなら此処が蛇の巣穴なら、彼方は蛇の口の中だ。僕達はそこに迷い込んだ無知な蛙。さっきのは正しく『蛇に睨まれた蛙』と言う状況だったんだろう。

必死に手を伸ばして引き戻そうとするが、幽夜に届く事は無い。そのまま石畳 境界 を踏み越えて

「洩矢サンに八坂サン、お久しぶりー」

誰がどう見てもフレンドリーに話し掛けた。

「私は洩矢諏訪子。さっきはゴメンね、脅かしちゃって」

「八坂神奈子。諏訪子にはキツク言っておくから、許してやってよ」

守矢神社、境内、宴会場と化したブルーシート的一角。目の前には有名な銀色男の炭酸飲料が入った人数分の紙コップと焼き鳥と枝豆。ビール持ってこい。

先程の威圧感（体感的には威圧なんてものじゃなかったが、本人達曰く「少し睨んでいただけ」だとか）を放っていたお二人……洩矢さんと八坂さんと僕達一行は座っていた。

「む。なにさ、神奈子だって調子に乗って罠まで仕掛けて誘ってま
でいたクセに」

「ところで幽夜、そちらの三人は？」

口を尖らせる洩矢さんを見無視して、此方に話題を振ってくる八坂さん。って、やっぱりアレって罠だったんだ。危ねえ。

「こっちのワイシャツの子は宇佐見蓮子、ナイトキャップの子はマ
エリベリー・ハーン。二人共大学生で、『秘封倶楽部』って言うサ
ークルで超常現象を調べてるんだって」

「……私達の特徴ってそんなもの？」

「ナイトキャップって……」

「気にしない気にしない。んで、こっちのハーレム君が赤瀬風人。

『水香神社』の……神主？ だよ」

「ハーレムじゃないから。決してハーレムじゃないから」

複数の女性に愛されるのってあんまり好きじゃない。だから言
ってホモでは無い。否、断じて否。

「こんだけ人を巻き込むのなら元気なんだね。安心したー」

「ちよつ、洩矢サン。それどういう意味ですかー」

「そのまんまの意味だよ。幽夜ってば歩いただけで迷惑掛ける様な
存在だし」

洩矢さんの一言に全員が頷く。その様子に照れくさそうに頭を掻
く幽夜。誰も誉めてないから赤くなるな。さっき感謝して失敗だっ
た。

「三人も大変だったでしょ。どうせコイツに無理矢理連れて来られ
たり」

「いやーははは……そんな感じです、ハイ」

「やっぱり」

ハア、とこの場にいた全員を代表した溜め息。いや、もしかした
ら全員が溜め息を吐いたのかもしれない。

「けど、幽夜さんのお陰で此方の神社まで連れてきて貰ったので、
そんなに迷惑は……」

「駄目だよ、そんな風に恐縮してちゃ。コイツはどんどんつけあが
るタイプだから、嫌なモノはスパーンと言ってやらないと」

「あれ、なんか何時の間にか私が糾弾される話になってるのかなコレは」

「良い機会だ。もつといてこまされてろ」

「ちよつと今風人君からどす黒いのが出なかったかなあ？ 後で社務所裏来ようか」

何時のヤンキーだ。普段弄ってるんだから弄られる日があってもいいだろう。

「そう言えば赤瀬君。神主だった？ 若いのに苦労してるねえ」

「あ……いえ。他にやる人間がいなかったからやってるだけで、仕事も少ないですから……苦労って程じゃあ無いです」

八坂さんの如何にもおばさんらしい口調。苦笑いしながらそれに返答。世間話って言うのは、どうにもやりにくい。

「そう。でも、神様に仕えるなんて大変だろう？」

「仕えるだなんて……子供の頃からの習慣があるだけで……」

やはり同業者だからか、其方関連の話ばかりが飛び出てくる。余り好くないとは言え、野球やサッカーの話なんかが出てくるよりはマシだ。

「けど、君みたいなのが子供の頃から神職に携わるなんて、苦労が無きゃおかしいだろう」

「ええ そりゃあ。簡単じゃあ無かったです」

思い出すのは、とても厳しく、愚かだった父親。

五歳に満たない僕に叩き込んでいたのは、全てが神社の為の事。この冷めた思考を培うには十分な『修行』だった。

幼い僕には分からなかった。何故僕がこんな事をしなければなら
ないのか、では無く、何故父は見えもしない『神様』なんてモノを
信じられたのかが。

そんな考えを見透かす様に、父の『修行』は激しくなっていた。
途中で倒れようものなら罵り奮い立たせ、小さな自我を極限まで削
らせた。

まるで『神様』を信じ込ませたい様に。

そんな環境での唯一の慈悲の心は母親にあった。

父親に強く言えず、積極的に助けはしなくとも、なんとか生きて
いける位に命を救っていてくれた。

それだけでも、僕は母親からの愛は感じていたと思う。例えそれ
が父親に命じられた母の愛だとしても、満足だった。

「……………」

少しの沈黙を紛らわせる為に、ジュースを一口飲む。弱まった炭
酸が口内を刺激する。

僕は、苦勞したのだろうか。他人より大変だったのだろうか。

……答えは出ない。出る訳が無い。僕は僕以外の人生を知らない
から。それに、どんな生にもそれ相応の苦勞がある筈だ。それを同
じ尺度で見るなんて出来ない。

「ん？ どしたの風人」

余程暗く見えたのか、幽夜が声を掛けてくる。どうも昔を思い出すと塞ぎ込んで仕方無い。

「いや、何でもない。そう言えば幽夜、此処にはどういう理由で来たんだ？」

「え？ ああ、祭りがあるって言うから」

「お前こそ社務所裏に來い」

冗談だと分かっではいるが真顔で過去進行させてたモノを聞くのはブチンと何かくる。

「まあいいや、どうせ僕は関係無いだろ？ ちょっとその辺歩いてくるよ」

「ん、分かった」

特に引き留める事は無いのか、ひらひらと手を振る幽夜。それはそれで何か虚しいが、このまま空気に漬け物石を置いていても仕方が無い。靴を履いて、出店の方向へ歩いていく。

……八坂さんとの会話の終始感じていた威圧感を振り払う為に。

「チツ、逃げられたか」

凧人が歩いていくのを見ながら、ポツリと八坂サンが零した。

「さつきから凧人にゾッコンですね、八坂サンは」
「ふん」

下らない、とばかりにコーラを一気飲みし、何処から取り出した発泡酒を取り出す。私も頂きながら、不快そうに語る八坂サンに付き合う。

「……幽夜、本ッ当にお前は迷惑な奴だな。此処に初めて来た時と変わってない」

「お褒めに預かり……」

「褒めてない」

ボケにも付き合ってくれない。悲しい。

確かに凧人を連れてきたのは気に障るかと思ったけれど、まさかここまでとは思わなかった。

「八坂サンから見ても、彼はどーでした？」

「お前と一緒にじゃなければ境内に入った途端に『隠し』てたか『潰し』てた」

まだ中身が残ってる紙コップを握り締めながら、毒づく様に声を絞り出す。その様子は流石にゾクリとする。

「ありやいや、結滞なお出迎えで。そんなにですか」

「……アレを人間と言うには澱み過ぎている。だけど、妖怪と言うには澄み過ぎている」

つまり、どっちでも合つて、どっちでも無い。私の時と似たような事を言うんだなあこの人。

考えを見透かす視線を向けてきたのは心の声が終わった直後だった。

「お前はもっと酷い。お前の本性こそバリバリ裂けるドス黒いクレパスだ」

「やだなあ、これが都会で今流行ってるギャップ萌えって奴ですよ」
「どうやら燃やして欲しいみたいだな良し分かった」

「燃やすべきはその体脂率いやいやその棒下ろしましょうよオンバシラでもなんでもいいすけど人前でそんなド派手なパフォーマンスはやめて止めて洩矢サンも笑ってな」

なんか神社の方から二本同時はらめえーとか悲鳴が聞こえた気がするが別にそんな事は無かった。

境内から出た所に並ぶ出店まみれの商店街を歩きながらふとそんな事を考えた。

「結構盛り上げてるんだなあ」

提灯の灯りがどこまでも続いているのを見ると、守矢神社の派手

さ加減がそれなりに分かる。こういう提灯って神社の近くだけで十分だろうに、わざわざ人通りが多い所まで伸ばして。呼び込みに苦勞してるんだ。

「……その苦勞は報われてるのかどうか」

正直な所、疎ら。出店に立ち寄る人間はいても、そのまま神社に足を運ぶ事はないみたいだ。

まあ境内は（ウチと比べたら）賑わっていたし、そこまで客寄せに必死では無いと思う。別に悔しいだなんて思っていないです。妬むなんて、まさか、ねえ？

「……やる事無いし先に帰ってるか、いやでも携帯電話無いし……」

お互いの連絡手段が無いとこういう時厄介だ。携帯電話なんて持つてなければ気楽だし金掛からないからいいけど不便だし、持った途端に依存しやすそうだし。

歩きながらどうしようか考えていると、何の偶然か件の品を発見。

「緑色の携帯って……こういう神経してんだろ」

正確になら若草色とでも言うべきか。カエルのストラップが付いた薄い携帯電話と蛇の刺繍が入った巾着。少し路地に入った所に落ちていたせいか、誰にも気付かれなかった様だ。

「ええっと、どうすればいいんだっけ。自宅に連絡しとけばいいのか？」

ウチの祭の時にお手伝いさんが使っていたやり方だけど、こういうのって勝手に開けていいんだろうか。ちょっと疑問に思いつつも、

液晶画面を覗いてみる。

見慣れない液晶画面には『110』の数字。『発信』の文字に選
択カーソルが合わせられていた。

「……………」

なんか、凄く面倒な事が起こってる気がする。もし想像通りなら
……………いや、想像の翼を広げすぎるのは宜しくない。取り敢えず
コイツを交番に届けて…………

「 ? !
「 ! !

路地の奥から男女の声。複数の男性の怒鳴り声らしきモノと、女
性の叫び声らしきモノが耳に入ってしまった。

全力で無視したい。つか今すぐ宿に帰って寝たい。忘れたい。
けれど残念な事に僕の好奇心と僅かながらの良心が、路地へと進
ませる強制力となった。

電灯の灯りも届かない、コンクリートの壁の間。灰色の筈の壁が
灯りと闇が混ざり青紫色へと色を変えていく。

そうやって周りを見る暇は1分も経たずに無くなった。

「 ……あちゃあ」

路地の最奥。騒ぎの発生源である集団がそこにいた。

「 ! !

「 !? !」

何を言ってるかはハッキリしないが、恐らく罵りながらじたばたする何故か巫女服の髪の長い女性と、今時いるとは思えないモヒカン頭とリーゼント頭とスキンヘッ드의男。どう見たって強姦目前な状況。

出来る事なら助けたい……が、そんな義理も力も勇気も持ち合わせていない。ここまで来れたのはあくまで野次馬根性。このまま踵を返しても……うーん、それはそれで目覚めが悪い。

悶々と考え込む事30秒。腹を括り足元を見してみる。丁度良い具合の缶を発見。

靴紐の準備はおーけー。それではピッチャー振りかぶって……..
ストライク。

「 うええええええ！ か、顔になんか！？ なんだあ！？」
「 きったね、なっ やんじゃねえかコレ！ 誰だこんなひでえ事するんのは！」

「 おいそのガキ！ 人様に飲みかけの缶投げるなんて業の深い事……..
って、逃げてんじゃねえ！！」

作戦もへつたくれも無く、ただ缶をぶん投げて注意を引くだけ。
後はあそこの女性と自分が逃げられれば任務完了！

怒声を揚げながら走ってくる男達。大通りまで来れたらなんとかなると信じながら逃げる僕。

後数秒で灯りの下に、と言う所で決着がついた。

「 う、わッ」

急いだせいで脚が絡まったか、額を強かぶつけた。起き上がろうとした所に背中への打突が決まる。

「馬鹿だコイツ、自分で転びやがった」

「オラ、コツチ来やがれ！ お前みたいのは俺達が教育的指導してやる、よッ！」

髪の毛を掴まれ、頭がそれに反応する前に頬へと右ストレートを食らう。痛みの前に視界が揺れて気持ち悪い。

ズルズルと引き摺られ、またもや薄暗い場所に逆戻り。途中何度か蹴られたりしたお陰で服が汚れた。

目の端に入った女性を見てみれば、スキンヘッドに捕まえられ口まで押さえられていた。よく考えてみれば、三人が一気にこっちに向かってくる訳無いじゃないか。嗚呼、自分の無駄な正義感が憎い。

「この野郎、ヘラヘラしやがって。俺の面を砂糖まみれにした癖に生意気なんだよ！ オラッ！」

鳩尾に丁度入る膝打ち。胃袋が収縮するのを感じながら、自分の顔に意識を集中させる。どうやら自嘲が漏れていた様だ、失敗失敗。久々の喧嘩……いや、こんなのは喧嘩なんて言わない。一方通行の暴力だ。思い返せば、殴り合いの喧嘩なんてやらかした覚えが無い。

こういう状況はなんと言ったか。丁度良い言葉があったと思うが……はて。

「ヒーローにでもなりたかったのか？ ああ！？ このクソガキ！」

こめかみに拳骨がクリーンヒット。滲む視界が壁にまで飛び、脳味噌が芯から揺らされる。

……思い出した、今の自分の状況。

関係無い事に首突っ込んで、結局どうにもなって無くて。

『無様』って言うんだっけ。

「胸糞悪い……いいやもう、その女連れてどっか行こーぜ」

モヒカン頭がそう言い、僕の胸倉を掴んで反対側の壁に投げつける。転がる先にはコンクリートの堅い地面。

「じゃあオレんち行こうぜ！ こっからすぐ行けっし」

「お前んトコ汚ねえじゃねえか。あんなゴミ溜め行けるかよ」

遠ざかっていく声。視界を無理矢理持ち上げる。

その背中を見ると悔しくは……多少ある。惨めな気持ちは胸一杯だが、もっと多い感情は 疑問。

男達が後数十秒で通り過ぎる光と闇の境目。其処には、あの場所
境内と同じモノが見える。

『……彼処から向こうは、普通の場所じゃない』

ふと、ハーンさんの台詞が耳に蘇る。あれはどういう意味なのか、そもそも同じモノを見ていたのか。それすらも分からない。

だが、今なら少しは理解出来た。あの境界線から向こうは……いや、此方側が『普通の場所』じゃない。寧ろ彼方側が『普通の場所』なのだろう。少なくとも、今は。

口角が再び上がる。だが、僕の意識は自分の意思を理解出来ていない。

指先が自然に動く。中空で境界線をなぞる様に。

その行為自体になにか意味はあるのだろうか。今は分からない。

だけど、なぞった瞬間、酷く頭が痛んだ。

彼らにはどう見えたのだろうか。光と闇が分断される光景が。彼らはどう感じたのだろうか。現実が幻実に変わる瞬間を。

飛び込んだ蜘蛛の巣の恐ろしさを僕達を知るのには、そう時間は掛からなかった。

010：境界の内側へ 中 （後書き）

やっと幻想入り……では無いです。まだ
ただまあ現実世界からは確実に遠ざかってます

分かり易いチンピラっていいね。書きやすいね。と言うより書いて
て楽しかった

ボツにした台詞もいっぱいあるけど良く考えたら鉄生の台詞に似て
るなーとか思ったり

後 っちゃんが顔に掛かった時の気持ち悪さは異常。特にオレンジ
味。砂糖入れ過ぎだろあれ

011：境界の内側へ 下 (前書き)

コミケまでに間に合った……

011：境界の内側へ 下

其処はまるで夜の海。

其処はまるで厄の渦。

其処はまるで獣の懷。

一日に二度も変な経験をするなんて、ある意味幸運なのかもしれない。そう思いながら、この紫色の空を見つめ続ける。

僕は何をやったのかは分からない。だけど、やらしたのは恐らく僕だ。

「……………いてえ」

酷く頭が熱い。痛い。目に入る光の一つ一つが視神経を焼き切っている様で、それでも読み取った光に脳が焦がされそうな気分。痛みには慣れているつもりだったが、内側からの痛みは鍛えられるものじゃない。

人間の脳は常識に守られている、と何処かで聞いた覚えがある。常識と言う鎧があるからこそ常識に潜む非常識に鈍感になれ、常識と言う戒めがあるから自らに潜む非常識を殺す事が出来る、と。

けれど、今この状況下で。常識を振るえう人間がどこにいるだろうか。この、ありもしない境界に遮られた世界で。

この場では常識と言うモノは鎧なんかでは無く、単なる重荷にしかならないんじゃないか。

「あ……………ありのまま、今、起こった事を話すぜ！」

「俺達は女を連れて大通りに出ようと思ったたら何時の間にか変な場所にいた」

「な……何を言ってるのか分からねーと思うが俺も何がどうなってるのか分からねえ……」

妙にテンポの良いチンピラ共の声が響く。遠くうねる様に聞こえるのは場所のせいか、先程までの暴行のせいか。

いつそあれぐらい素直に反応出来たらどれほどいいだろう。だけど、僕には受け入れる。疑問を残して受け入れてしまう。

ふと感じた気配に頭ごと目を向ける。

其処に居たのは、不思議な女性。ゆったりな紫色の服　確か、ネグリジェとか言うもの　に身を包み、快晴の夜なのに傘を手に持ち、頭には大きなドアノブカバーの様な帽子とふんわりとした金髪が目立つ。

顔立ちは、驚いた事にマエリベリー・ハーンそっくりだ。場所が場所ならハーンさんに見紛っただろう、とても美しい。だが、ソレが纏うのはハーンさんには似ても似つかない。だからこそ分かる。共通点の多い対比物があるからこそ、分かる。

この人は、ニンゲンではない。

この紫色の闇に立つ姿が示す。

異常を常とし、常に異常に身を置く存在だと。

僕を見る金色の瞳が表す。

真の意味に『人間』を見下すとはこう言う事だと。

動かない身体が恨めしい。いや、本当なら動ける身体だからこそ

恨めしい。

何故、こつも簡単に疎み上がるのだろう。何故相手を理解してしまふのだろう。

目線が僕から外れ、真逆の方向　即ち、あのチンピラと女性に向けられる。暫く続いた沈黙の後、ネグリジェ姿の女が歩き出した。

「珍しく『巢』に掛かるのがいると思ったら、やっぱり珍しいモノだったわね」

誰にも向けられていない独り言。さっきまで騒いでいた筈のチンピラすら黙り込む。

「守矢の現人神。貴方はまだ此方に来なくて良いわ。貴方だけが来ても意味は無いもの」

また今度。

そんな声がしたかと思えば、髪の高い女性はまるで最初からいなかったかの様にいなくなった。

「さて、残りは……」

「お、おいアンタ！　さっきの女、どうしたんだよ！？」

言葉を漸く思い出したか、モヒカン頭が金髪の女に言い寄る。

「アンタだろ？　いきなり変な場所連れてきやがって、元のところにツツ、ツ、ツ！？」

モヒカン頭が突然顔に手を触れ、ジタバタしだす。しかし動き回

るだけで叫び声の類は聞こえてこない。

「お、おい！ いきなりどうしたん……うわぁあ！？」

「く、口がッ、口が無くなってやがるッ！ 唇がくっ付いてやがるんだッ！」

変な事を言いながら、もがくモヒカン頭から離れるチンピラ二人。その様子をつまらなそうに見つめる金髪女性。

「うるさいわね貴方達。先にイかせてあげるわ」

チンピラ三人の影も形も無くなる。けれども今度は最初の巫女服の女性の様に溶ける様ではなく、穴に落ちる様に消えたのが見えた。

理解は出来ない。だが掴める。彼女がこの空間の主だと。

「後は、その傷だらけの坊やだけ？」

見下されたままは癩なので、竦んだ脚で何とか起き上がり痛みが収まるのを待つ。何処までも広がる空間のせいであるでガラスの上に立つ様だが、質感は先程と同じコンクリートだ。不思議としか言いようが無い。

傷は無いのだからこれ以上は痛まないけれど、傷の痛みが無くなる事は無いのが少し辛い。

金髪女性の目つきは、まるで品定めする鑑定士だ。頭の前からつま先、背中にまで視線を感じてしまう。

「ふーん……貴方もさっきの現人神と似たようなものか。どうするの？」

「ど、どうするって……」

選択肢が示されていないのに選択を迫られても困る。

「……ああ、自覚が無いのか。だったら、少し話してあげなくちゃね」

口の中で返答を探していると、女性がポンと手を叩いた。なんか、その合点の行き方は古臭い。

「簡単に言うと、貴方には人間の常識では計れない力を持っている。だから、貴方にその意思があるなら……もしくは意志が無いなら、ある場所に来ない？ って言う事」

お分かり？ と締められたが、唐突過ぎて良く分からないです、はい。

「えーっと………変な力があるって自覚はありますけど、あつたからってなんでそんなお誘いを受けなきゃいけないんですか？」

「そうね、一種の風習みたいなものよ。貴方の為を思つての事もあるけど」

そんなキャッチセールスみたいな風習があるものか。こっちの方が数百倍身の危険を感じるけど。

「じゃあ、その場所って言うのは……」

問うと、女性が傘を畳みを下に向ける。すると、紫の空間がぼんやりと色を変え……一つの映像となった。

森。山。里。大きく見るとそんな風に分けられる、何処か田舎の上空からの映像の様だ。

「人間に忘れられたモノが集う土地」

「忘れられたモノ？」

「そう。今の生活が有るのは昔の生活が忘れられているから。今の科学が有るのは昔の呪術が忘れられているから。今の人間が有るのは昔の妖怪が忘れられているから。」

私は忘れられたモノ達が消えない様に、残していく為に、この土地
『幻想郷』を作ったの」

幻想、郷？

聞き覚えがある様な、あつたとしても僕には縁が無さそうな。

「幻想郷は全てを受け入れるわ。どんな異端者も、どんな存在不適合者も、どんな人間も、妖怪も、幽霊も、神も悪魔も。居場所が無^{忘れ}い者全ての居場所が此処にあるの」

まるで夢物語を唄う様に、女性は語りかけてきた。

「貴方、名前は？」

「……赤瀬、凧人」

映像が消え、代わりに妙な割れ目が現れる。底は見えず、まるで地獄に続く穴の様。

「じゃあ、凧人。貴方が元居た場所に未練があるなら、振り返って歩き続けなさい。そうで無いなら 何も無いのなら、この隙間に落ちなさい」

審判を下す様な声が、紫界に響く。

「貴方を待つ人がいるのなら止めはしない。だけど、ただ異を嫌うだけで異を拒絶するのはダメよ」

つまり、無理に連れて行く訳じゃない。だけど、留まる理由が無いなら来い、と。随分良心的な事で。

穴の先には、先程言っていた忘れられたモノの地、幻想郷があるんだろう。興味が無い訳じゃあない。だが、興味しか無い。

彼女が言っているのはこういう事だろう。自分の能力を忌み、忘れ去りたいのなら此方に来い。

嗚呼、勿論忌まない事は無かった。傷があつと言う間に治るなんて、そんな力が人間社会に必要な筈が無い。

だが、それがどうした。ただそれだけで自分の居場所を捨てて新天地に行けと。冗談じゃない。笑い話にもならないだろう。

踵を返し、足を前に動かす。痛みの収まりだした足は、問題無く紫色を踏みしめられる。

「本当に戻るの？」

「……………」

無言で歩を早める。別れの言葉なんて物はいらない。これは、質の悪い白昼夢の様な物だ。

だが、この白昼夢は、冗談と言つのを心得てしまっていて、

「もしかしたら、貴方の家族が此方にいるかもしれない。それでも？」

簡単に足を縫い止められてしまう。

「……………僕の家族はもう死んだ」

両親はもうこの世にいない。そう言い返すが、足を止めた時点で負けた様なものだ。

「誰も死体は見えていないのでしょうか？　両親なんて、ただ娘を探しに」

「黙れッ！！」

女性の言葉と、それと共に蘇る情景を遮る。

どうしてコイツがその事を知っているのかは分からない。忘れ去りたい記憶を何故握っているのか。

金色の瞳を睨みつける。出所が分からない怒りが恐怖を上回り、身体の震えも感じない。

「私が言っていたのを覚えてないのかしら？　幻想郷は忘れられたモノが集う土地なのよ。貴方が罪を忘れたとしても、幻想郷には残ってるわ」

「そんな馬鹿な事が」

「もう一つ。幻想郷には貴方の常識は存在しないわ。其方の世界の常識は、まだ忘れられて無いでしょう？」

戯れ言を堂々と断言する女性。だがその迫力は本物で、僕の文句はあっさりとかき消された。

「……貴方の名前は」

「八雲　紫。幻想郷の管理者よ、以後宜しく」

「八雲さん、貴方は大きな勘違いをしてる。僕は今の世界に苦痛を感じている訳じゃあ無いんだ。其方に行く理由が無い！」

「でも、留まる理由が無いのでしょうか？」

暴論だ。と言うより酷い理屈だ。確かに留まる理由はない。だが、僕は訳の分からない所に行くなんて真っ平ゴメンだ。

その時、あの人の声が耳に蘇った。

「す」

「ん？」

「います。僕の帰りを待つ人が」

怒りが無くなった目で、八雲を見つめる。何を考えているのか、何を見据えているのかは分からない。だが、この人を騙せないと僕は帰れないんだ。

「あら、どんな人なの？」

「僕をこの場所にまで連れてきたトラブルメーカーで、良く分からない旅行者で、何考えてるかも分からない人です」

どんな理屈でもいい。まくし立ててこの人を誤魔化せばいい。とにかく、喋るしかない。

「人の事をからかうのが好きで、自分が楽しければ良くて、みんなが楽しければもっと良くて、何時も何時も騒がしい人で、迷惑極まりないけど憎めなくて」

「名前は？」

「……え？」

黙って聞いていた八雲が、突然呟いた。その顔はさっきまでの余裕たつぷりでは無く、何故か影のあるものだ。まるで、思い出したくない思い出を味わってるかの様な。

「だから、その人の名前は！」

「み、水元だよ。水元幽　　！？」

勢いに負けて答えると、喉に緊張が走る。手の形の万力で徐々に締め上げられる様な感覚。

「いッ、き、な……り……なに………」

「……そう、か。赤瀬の血族なら知っていても不思議は無いわね。でも、軽々しく彼の名前を口にするのは頂けないわ」

抵抗しようと八雲の腕を掴むが、女性の腕とは思えない力強さで気道がどんどん狭くなっていく。単純な握力だけで、だ。息苦しさの中、八雲の呟きが酷く耳に残った。

貴方は此処にいてはいけないの。あなたは人間じゃあないんだから。

そこから先に起こった事は、頭痛と共に何処かへ忘れていつてしまっただけ。

011：境界の内側へ 下（後書き）

さて、これからどうなるんでしょう。作者にも半分分かりません
詳しい事はコミケで並びながら考える事にします。では良いお年を

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5350x/>

東方災生変

2011年12月29日22時47分発行